



道路の向こう側

目の前の信号が赤に変わった。

足を止めて、見るともなしに反対側の歩道に目をやったとき、心臓が1回小さくジャンプした。沢井涼がいる。

———なんであんなところにサワさんがいるんだろ。

駅を出て、地下道を通り、地上に上がってきた時には気がつかなかった。

朝のバス通りは、たくさんの車が行き交い、雑然とした雰囲気漂っている。今朝は1本電車に乗り遅れてしまい、かなり焦って歩いてきた。国道を横断する歩道橋は小走りで駆け上がった。急いでいるはずなのに、橋を渡る時はつい下の国道を走る車の中にワーゲンを探してしまう。転ばないように気をつけながら階段を駆け下りて、1つめの信号は青だったが、2つ目の信号が赤になった。

繁華街のはずれにあたるこの交差点の周囲には、古びた店や昔からの住宅、小さなビルなどが混在して並んでいる。交差点はさほど大きくなかったのも、すぐに青信号に変わった。

教科書や参考書で膨れあがった学生鞆を持ち直して、足を踏み出す。横断歩道を渡りながら、さりげなく沢井の方をうかがった。彼はこちらに気づいたふうもなく、すたすたと歩いて行く。

信号を渡ったあたりから、道はゆるい上り坂になる。等間隔で植えられた街路樹が、淡い緑色の葉を光らせていた。5月になって、街路樹はいっせいに力を取り戻したようだった。坂の上の方から、朝日がこぼれてくる。ときおり、建物の隙間から、金色の刃が飛んできた。目を貫く光を感じながら、黙々と歩く。前にも後ろにも、同じ高校へ向かう生徒が歩いている。しかし、反対側を歩く生徒はそんなに多くない。繁華街の方から来る生徒はともかく、駅の方から歩いてくる者は普通右側の歩道を選ぶ。

歩行者は右側通行だから、というだけではない。高校の正門前には、この道の途中で右に曲がって1本奥の道に出た方が近道になる。反対側にいるとひとつ余分に信号を渡らなくてはならない。それを回避するためだ。

もう一度、沢井の方を見る。どうやら車道を挟んで、並んで歩いているような形になっているみたいだ

———サワさんの速度に合わせて歩いてみようかな。

車道を挟んで、こっちとあっちで並んで歩く、という発想が奈緒をわくわくさせた。ちらちらと彼の姿を確認しながら歩いて行く。黒い詰め襟の学生服に身を包んだ沢井は、背筋をすっと伸ばして、きりっとした横顔を見せて歩いている。

片側1車線の車道は道幅が狭く、道路越しでも沢井の顔はよく見えた。色白の頬がかすかに紅潮している。きれいな顔してるなあ、と思った。でもなんとなく幼くも見える。奈緒が持っている「高校生」のイメージからは遠く、少年のようだ、と思う。

16歳は少年だろうか。4月の半ばに誕生日だった沢井は奈緒より先に16歳になった。世間から見たら歳は少年なのだろう。しかし奈緒には大人の年齢のように感じられる。夏には自分も16歳の誕生日を迎えるが、そのときには今より大人になっていられるのだろうか。まるっきり現実味

が感じられない。

思ったより沢井は歩くのが速かった。気を抜かずに懸命に歩かないとすぐに遅れてしまう。重い学生靴の持ち手をぎゅっと握りしめて、奈緒は足に力を入れた。歩道に敷き詰められた20cm四方の敷石を2枚一気にまたぐ。それはいつも歩いているときの1.5倍くらいの歩幅だったので、次第に息が苦しくなってきた。額に汗が噴き出してくる。

ようやく上り坂が終わったあたりで、高校前を通るバスが追い抜いていった。中にはぎっしり学生服やセーラー服の生徒が詰まっている。

やっぱりバスに乗ればよかったかな、と思い、いやでもあんなに混んでるんじゃあな、と思い直した。電車がけっこう混んでいたので続けて混んだバスに乗るのがうっとうしく、時間的に厳しいかとも思ったが、歩いた方が早いと見切りをつけたのだ。そのバスに追い越されてしまった。

。

ふと見ると、沢井が少し先を歩いている。慌てて奈緒は小走りで進み、なんとか再び沢井と並んだ。

下りになると少し余裕ができた。靴の持ち手が手のひらに食い込むのが痛くて、何度も靴を持ち替えた。

下り坂は朝日を浴びて白く光っていた。1日の始めの、まだ手つかずの空気がほんのりと甘い。前の方に、男子生徒が数人かたまって歩いているのが見えた。

——男の子ってなに考えてるんだろう。

まっすぐ前を向いて歩く沢井を眺めながら、やっぱり高校生というよりは、男の子って感じだよな、と思う。

県立北岡高校に入学して1ヶ月が過ぎていた。

同じ中学出身の松井みどりと一緒に入った新聞部に沢井がいた。4人いる1年男子のうちの1人だ。

男の子たちはそれぞれ別々の中学から来ていたが、ウマがあったのかけっこう仲がいい。彼らは時々、奈緒には理解できないことをした。ふだん電車で通っているところを2時間近くかけて自転車で来てみたり、捨てられていたラジカセを拾って直してみたり。なぜそんなことをするのかわからない。わからなかったが、彼らの中には「面白いこと」の基準がちゃんとあって、その基準に沿って行動しているようではあった。

登校時にバスを利用せずに歩く、というのもそのうちの1つだった。上級生が歩いているのを見かけて、自分たちもやってみようと思ったらしい。4人組のうちの1人、松本和樹だけは自宅が高校の近くだったために、「駅から歩く」という遊びには参加できなかったが、残りの、鈴木令二、吉田稔、沢井涼の3人は、気が向くとバスに乗らずに歩いて学校まで行くようになっていた。

駅から学校まではおよそ3kmほどあり、普通に歩くと30分くらいかかる。朝っぱらから体力を消耗することもないと、たいていの生徒はバスに乗ることを選ぶ。ただ、バスの本数が少なく、毎回満員に近い状態になるのだ。バス路線に存在する学校は北岡高校だけではないので仕方ないのだが、なにせようんざりする状態であることは確かである。

奈緒も初めはバスを利用していた。中身がぎっしり詰まった学生鞆を持って30分も歩くなんて考えられないと思っていたし、バスがあるんだからバスに乗ればいいじゃないかとしごく単純に考えていた。

身動きもままならないほどの車内でじっと耐えながら、窓から見える徒歩の生徒を見て、ごろうさんなことだ、と思っていたのである。

しかし、4月の終わりのある朝、バスに乗り損ねてしまった。定期入れが見当たらなくなって、ホームで立ち止まって探していたら、一足違いでいつも乗るバスが出てしまったのだ。次のバスまでは15分もある。しかもそれに乗っていたら遅刻するかもしれないという、ぎりぎりの時間だった。

入学してまだ日も浅いうちから遅刻なんてしたくない。仕方なく奈緒は徒歩コースを選んだ。間に合わなかったらどうしようという不安で、ほとんど小走りの状態だったのだが、途中まで歩いたところでふと、自分がこの状態を面白がっているということに気づいた。朝の空気の気持ちよさ、頬を過ぎるほんの少し冷たい風、遠慮がちな朝日の美しさ。鞆は重かったが、予想外に気持ちが晴れ晴れしていた。

歩くのもいいかも。

それからは、奈緒も気分が乗ったときにはあえて歩くことを選ぶようになった。

新聞部の徒歩男子とかちあうことは、意外なことに少なかった。彼らは奈緒より早い時間に歩いているようなのだ。だから今朝、沢井の姿を見かけたときに驚いたのである。

みんなが歩く右側ではなく、左側の歩道を歩いていることにも、きっと彼なりの「面白いこと

」があるのだろう。それがなんなのか、奈緒にはさっぱりわからなかったが。

やがて右折ポイントが近づいてきた。バス通りから脇へ入る細い路地である。少し手前に横断歩道があって、沢井がこちらへ渡ってくるのが見えた。

別に待っている筋合いでもないのに、奈緒はそのまま右折して、細い路地を上がっていった。地形的に丘を上るような道路になっていて、若干勾配がきつい。ぐいぐいと足を進めていると、後ろから人の気配がした。振り返る間もなく、隣に沢井が並んだ。

「おはよう」

黙っているのも変だったのでぼそっと挨拶を投げかけると、「おはよう」とすまして挨拶を返してきた。

「こんな時間に珍しいね」

「磯山さんはいつもこの時間？」

「1本、電車に乗り遅れた。サワさんは？」

「僕はいろいろ。今日は磯山さんを見かけたからね」

どうということかと思ったら、2つ目の信号のあたりで前方に奈緒を見つけたので、速力をはかってやろうと思ってわざわざ反対側へ渡ったのだという。

「え？ サワさん、あたしの後ろにいたの？」

うん、と奈緒の驚きをさらっとかわすと、「磯山さん、歩くの早いね」と笑った。

奈緒は思わず笑ってしまった。

「ちがうよ、あたし、サワさんの速度に合わせて歩いてたんだよ」

「そうなの？ 僕は磯山さんの速度に合わせて歩いてたんだけど」

なあんだ、と2人で顔を見合わせて笑った。沢井は笑うとそれまでの冷たい雰囲気が消えて、優しい表情になる。二重の大きな目が面白そうに細められていた。

「ちょっと急ごう」

ふいに沢井が腕時計に目をやって足を速めた。奈緒も自分の時計を見て、あわてて沢井のあとを追った。

丘の尾根筋に当たる裏道には、何人かの北岡高生が歩いていた。そろそろ始業時刻が近づいてきているために、みな急ぎ足である。奈緒たちも急いで歩いた。道路脇の木々がやけに輝いて見える。今日もいい天気になりそうだった。

高校に入ったら、やるべきこと、やらなくてはいけないことが飛躍的に増えた。高等教育課程なのだから当然なのだが、北岡高校はこの地域ではトップクラスの進学校だったため、レベルも量もかなりのものだった。

入学式の翌々日にはさっそく実力テストがあり、後日順位表が張り出された。奈緒は自分でも思っても見なかった高順位を取った。まぐれだとは思ったが、悪い気はしなかった。

予習や宿題などやることは山のようにあって、さすがにげんなりすることも多かったが、でも奈緒は、勉強するのは当たり前のことだと思っていた。わからなかったり眠かったりで、さぼりたくなることは多々あったが、やらなくてもいいじゃないか、とは思わなかった。進学校に進んだということが、何を意味しているのか。そのことを奈緒はよくわかっていた。

見栄とプライド。

奈緒にあるのはそれだった。中学で受験校を決めるときに感じた回りの雰囲気。

「磯山さんは頭がいいから、当然北岡だよねえ」

実際に面と向かってそう言われたこともある。そんなことないよ、と一応は否定しながらも、心のどこかでそれを当然だと思う気持ちも確かにあった。

三年生のときは、それまでの人生でいちばんたくさん勉強したという自負がある。だから成績がよくて当たり前。内申書がよくて当たり前。自慢するという気もなく、自分のことをそう思っていた。

そんな自分が北岡高校へ入ったのだ。勉強するのはいうまでもない基本的なことだった。

中間考査の1週間前に、テスト範囲が発表された。テストは1日2科目ずつ、4日間の日程である。

「1週間で8科目はきついよねえ」

発表のあった日の放課後。奈緒は部室でみどりにぼやいた。

新聞部は現在「北岡」154号を作成中である。新学期にあたっての校長の巻頭言だとか、先生たちの離任・転任などの通知と挨拶、「サロン」という投稿コーナーの原稿の整理などを行っていた。もちろん中心になって動いているのは2年生で、1年はお手伝い程度しかできないために、部室に顔を出してもほとんど遊んでいるだけの状態だった。

本館3階にある準備室が新聞部の部室である。部屋の中央に大きな机が1つ置かれており、机のまわりにはカラーボックスや古い棚がある。そこには筆記用具からオセロ、トランプなどの遊び道具まで、さまざまなものがいれてあった。

奈緒は鞆を足下に置き、机につっぱした。

「あーあ、やだなあ」

みどりは、数学の問題集をやっているようだった。

「文句言ってもしょうがないじゃん。やるしかないでしょ」

「そりゃそうなんだけどさ」

「そうやってうだうだしてる間に、単語のひとつも覚えた方がいいよ」

確かにそうだ。

がぱっと身を起こし、急いで足下の鞆を開ける。中からサイドリーダーとノート、それに辞書を取り出して机の上に広げた。

「あたしもサイドリーダーやろっと」

中学の時はさほど英語が苦手だったわけではないのだが、いやむしろ、英語は点の取れる科目だったのだが、高校に入ってからはいきなり見知らぬ言語になってしまったような気がしていた。単語そのものは辞書を引けばわかる。その単語を、全体の文章の中で、どういう意味でとらえればいいのかということがわからない。日本語として意味の通る文章に訳さなければ、和訳の意味がないのだ。だから1ページ訳すのにやたら時間がかかってしまう。わかるようなわからないような英単語の海で溺れてしまいそうだ。

しばらく2人で黙って鉛筆を走らせていると、戸が開いて同じ1年の秋本舞が顔を出した。「あれ？ 2人だけ？」

「うん。なんかそうみたい」

みどりが顔も上げずに答えると、舞はしばらく考えてから戸を大きく開けて中へ入ってきた。後ろから2年の保科光も一緒に入ってくる。

「あ、保科先輩。こんにちは」

どうして舞と保科が一緒に来るのかいぶかしく思いながら、奈緒は保科に挨拶した。保科は一瞬目を泳がせたが、すぐに「こんにちは」と返してきた。

「勉強してるの？」

「うん。だって今日、中間の範囲が発表になったのに、全然間に合っていないから」

「お、まじめじゃん」

「へへ、まあね」

「あたしたちもここで勉強しようよ」

あたしたち？と不思議に思って舞を見ると、舞は保科の顔をじっと見つめている。

「そうだな。そうするか」

保科は鞆を机の上に置き、中から教科書とノートを取り出した。舞は当たり前のような顔で保科の隣に座り、やはり教科書とノートを取り出している。2人は、並んで座っている奈緒とみどりの正面に、並んで座っていた。

みどりはまだ顔を上げない。奈緒は体を心持ちみどりの方へ寄せて、口を動かさないように息だけでみどりに聞いた。「知ってたの？」

みどりはかすかにうなずき、「舞が告白したんだって」とささやき返してきた。

「詳しくは帰りに教えるよ」

当人たちを目の前にしてあれこれ詮索するわけにもいかず、奈緒は仕方なく英語の海へ戻ることにした。

しばらくすると部長の谷村昌男がやって来た。

「遅いぞ、谷村。おかげで勉強するはめになっちゃったじゃないか」

「わりいわりい。掃除が長引いちゃって」

「そんなもん、てきとーにすませとけばいいんだよ」

「そういうわけにいくか」

保科はそそくさと教科書やノートを鞆に戻し、「北岡」のゲラを広げた谷村のそばへ行った。舞はどうするのかと見るともなしに見ていると、しばらくノートに何か書いていたが、意を決したようにぱたっと鉛筆を置き、「あたしも手伝う」と保科のそばへ行ってしまった。

手伝うことなんかあるのか、と思ったが、シャーペンを取ったり、資料を取ったりする程度で、つまりは保科の近くにいたい、ということのようだった。

その姿を見ていたら、まじめに勉強するのがばからしくなってきた。

みどりがきりのいいところまでできた、というので、帰ることにする。

「先に帰りまーす」

「ああ、テスト勉強がんばってね」

先輩たちもがんばってください、と手を振りながら部室を出た。舞はにこにこしながら手を振っていた。

部室を出て、少し薄暗くなり始めた階段を降りた。人けのない校舎はなんだかよそよそしい感じがする。昇降口で靴に履き替え、外に出ると、夕暮れのふわっと甘い空気に包まれた。まだ日は落ちていないが、だいぶ傾いている。

「5月も半ばになると、やっぱり暖かいよね」

「そうだね」



西門へ続くポプラ並木を抜けて、バス停へ向かった。

「で、なに。舞は保科先輩に告白したわけ？」

「らしいよ。ほら、連休の時、みんなで映画行ったことあるじゃん」

5月5日のことだった。先輩が誘ってくれてみんなで映画を見に行ったのだ。

中学のときは校則で禁止されていたので、友達と映画を見に行ったのは初めてだった。奈緒はただ嬉しくてはしゃいでいただけだったが、舞は少し違ったらしい。

「家に帰ってから先輩に電話したんだって。そのとき告白したって言ってた」

「へえー。そんなことがあったんだ」

「それまで、毎日のように、先輩と目があつたとか、今日は会えなかったとか、さんざん教室で聞かされてたんだよ」

「じゃあ、よかったじゃん」

「今はノロケばかり」

みどりのふてくされたような口調がおかしくて、奈緒は吹き出してしまった。

「先輩ってカッコいいじゃん？ だから他にも狙ってる子がいて、舞としては気が気じゃなかったらしいよ」

「ふうん」

そうとしか言いようがなかった。奈緒が入学以来勉強に追われてあたふたしている間に、ちゃんとそういうことをしている人もいたのだ。

「今は朝、図書館で一緒に勉強してるんだって。」

「舞がねえ……」

舞は中学2年の時に同じクラスだった。青白い顔をして、いつもうつむいているような子だった。3年の1学期にはしばらく学校へ来なかったこともあった。3学期になって急に成績が伸びたおかげで、滑り込みで北岡高校を受験することができたと聞いた。

みどりと奈緒が新聞部に入るために部室へ行ったとき、さほど興味もなさそうに、ほとんどつきあいの感じについてきたのだが、どういうわけか一緒に入部することになった。あのとき、谷村と保科が部室にいて、一言二言話をしただけだったのだが、もしかするとあのときから舞は保科がいいと思っていたのだろうか。

話しているうちにバス停に着いたが、運悪くバスは出たばかりだった。

「なんかさ、舞、きれいになったよね」

バスの時刻表を見つめながら、ぽつんとみどりがつぶやいた。保科の顔をじっと見つめていた舞の顔を思い出す。

「うん、そうだね。いいことだよ」

青白い顔をしてうつむいているよりはずっといい。

新聞部の北岡日誌が奈緒のところに回ってきていた。

夜。風呂に入った後机に向かい、テスト勉強をやろうとして、つい日誌を開いてしまった。ぱらぱらと前の方のページを眺める。谷村のゴシック体のような文字、保科の殴り書きのような文字、川村景子の几帳面な文字……。奈緒の前に書いたのは鈴木令二だった。怪しげなマジシャンのひげのように妙なひねりのきいた文字で、小難しいことが書き連ねてある。それを読んでいるうちに、奈緒も何か書きたくなった。

「どうして勉強しなくてはならないか。それはもちろん北岡高校を選らんだときからわかっていたことだが――」

鉛筆の音が、静かな部屋に響く。しばらく奈緒は文字を書き連ねることに没頭した。

気がつくと一時間たっていた。ノート3ページにわたってぎっしり思うことを書いてようやく、勉強に立ち向かう気力がわいてきた。

「よし、やるかー」

小さな声で気合いを入れて、数学の教科書を開いた。

翌朝。いつもより早起きした奈緒は、がらがらに空いたバスに乗って学校へ向かった。

教室へは寄らずに、図書館へ向かう。もしかしたら、と思ったが、案の定、舞と保科がすでに来ていた。別の机にしようかと思ったのだが、舞が手を振るので仕方なく同じ机についた。

「おはよ。珍しいね、どうしたの」

「ゆうべ、全然できなくてさあ。ちょっとでもやろうと思って」

「そっか。がんばらないとね」

舞は小首をかしげて微笑んだ。うん、と生返事をして、数学の教科書を広げる。結局ゆうべは途中で挫折してしまったのだ。他にも、リーダーとグラマー、古典と現国、地理と生物と家庭科をやらなくてはいけないのに、大丈夫だろうか。下腹がちりちりするような焦りを感じていた。

「おはよう」

後ろから谷村の声がした。

「珍しいね、磯山さんが朝、図書館に来るなんて。隣、座ってもいい？」

「あ、どうぞ。なんか昨日全然できなくて」

なぜか言い訳がましい言い方になってしまう。

「図書館でやった方がはかどることってあるからね。よし、時間がないからさっさとやろう」

谷村は英語の教科書を開いた。奈緒も数学の教科書に意識を戻した。しばらくみんな黙って鉛筆を走らせる。

一問、解けない問題にぶつかった。考えあぐね、ひょいと顔を上げると、保科が舞の横顔を見つめているのが目に入った。舞は真剣な顔でノートに何か書いていて気づいていないようだ。奈緒が見ていることに気づいた保科はすぐに目をそらし、教科書をべらべらとめくった。――保科先輩も舞のこと好きなのかな。

ぼんやりそんなことを思っていると、隣で谷村がなにかつぶやいた。

奈緒が谷村の方を見ると、谷村はかすかに笑って、「うらやましいよな」と言った。

「うん。……谷村先輩は彼女とかいないの？」

軽い気持ちでそう聞くと、谷村は苦笑いして「全然」と首を振った。

「磯山さんは誰か好きな人いる？」

谷村に聞き返されたとき、一瞬脳裏を沢井の姿がよぎったのはなぜだろう。

「今はまだそんな余裕ないし」

そう答えながらも、心の隅にひらっときれいな布がかかったような気がしていた。

中間考査まで1週間。やらなくてはいけない科目は8科目。1日1科目ずつつぶしていっても1日足りない。悠長に構えている余裕はないはずだった。

範囲が発表された日に、奈緒は一応勉強の計画を立てた。家庭科は捨てるしかない。そうして毎日1科目ずつやっていけばなんとかなるのではないか。

しかし、1日目に数学をやってみて愕然とした。全然進まない。深夜までかかっても半分くらいしか終わらなかった。少しだけ眠って、朝早くに図書館へ行こう。そこでなら、誰かいるかもしれないし、もうちょっと集中できるのではないか。そう思って図書館へ行ったのだった。

それからは、毎日図書館へ行った。もちろん家でもやったけれど、どうしてもだれてしまうのだ。

いつの間にか図書館が新聞部のたまり場ようになっていた。みどりも来るようになり、1年男子4人組も、いつも誰かが来ているという状態だった。沢井が来ている日はなぜかやる気が出た。来ない日は急にいろんなことがどうでもよくなる。奈緒のやる気は沢井の存在に簡単に左右された。

1週間はあっという間に過ぎていった。

計画は立てただけで終わってしまった。しまいにはテストが始まってから翌日の勉強をすればいいやと思うようになった。一夜漬けでもなんとかなるのではないか。そんな甘い見通しで中間テストに臨むことになった。

しかし、やはり現実は甘くはなかった。

1日目のグラマーと現国のテストはそこそこできたつもりでいた。ところが、テスト終了後、さっそく教室の後ろの掲示板に張られた解答を見て、手ひどいショックを受けた。が一んという音が確かに聞こえたくらいだ。グラマーの1問がほぼ全滅だったのだ。これでは60点とれるかどうかあやしい。どうしよう、と血の気が引いていく思いがした。

みどりと一緒に購買部へ行ってお昼のパンを買い、教室で食べた時に、

「どうしよう、みどり。グラマー死んだよ」

思わずみどりに弱音を吐いた。みどりはカステラパンをサクサクとかみちぎりながら、確かに難しかったね、とあっさり言う。

「みどりは全部できた？」

「うーん、まあまあ」

「いいなあ。あたし、現国もだめかも」

「現国は5番の選択問題が難しかった」

「あ、あたし、そこ全然だめだった」

話せば話すほど気が滅入った。

「今日こそがんばるよ」

みどりに決意表明して、部室には寄らずにまっすぐ家に帰った。

高をくくっていたのだと思う。中学の時にそこそこできたから。今まで通りにやればなんとかなるさとどこかで思っていたのだ。でも全然通用しなかった。

明日は生物と古典だ。どちらも覚える分量が多くててごわい科目である。テスト前にはついにまともに手をつけることができなかった。夕方から夜中まで、必死になって勉強した。2時間ほど仮眠をとって、また朝までかかってノートを埋め、なんとか範囲をさらうことだけはできた。

しかしそれでなんとかなるほど、高校のテストは甘くはないのだ。

2日目も、空欄をたくさん残した解答用紙を提出することになってしまった。

3日目も4日目も似たような経過をたどった。だんだんやけくそになってきて、赤点さえとらなきゃいいや、と捨て鉢な気分になった。

もっとできると思っていた。もっとがんばれるはずだった。それなのに、いったいどうしてしまったんだろう。こんなじゃ、実力テストの順位より低くなるのは目に見えている。そんな自分になるのが情けなかった。

それでも、テストが終わったあとは、途方もない解放感に包まれた。久しぶりに新聞部の部員全員が部室に集まり、「北岡」の最終仕上げをした。もうほとんどすることはなかったので仕事はすぐに終わり、谷村は保科に声を掛けて、体育館で卓球をするため部室を出て行った。舞も当たり前のように2人の後を追いかけていく。

滅多に部室にやってこない1年女子が3人来ていて、彼女たちと1年男子4人、それにみどりがバレーをやりに行くことになった。

「奈緒も行こうよ」

「手が痛くなるからやめとく」

「ふうん。じゃね」

軽く手を振ってみどりたちは部室を出て行った。

誰もいなくなると、狭い部室が心なしか広く感じられた。それなのに、空気が急に膨れあがって迫ってくるような気がする。息苦しくなって窓を開けた。グラウンドでサッカー部が練習しているのが見える。切れ切れに声が聞こえてきた。

———運動部は大変そうだなあ。

グラウンドの回りが緑で縁取られているのを見て、ふと四つ葉のクローバーを探しに行こうと思いついた。1年棟の横にクローバーの群生地があったはずだ。

部屋を出て階段を降り、1年棟へ向かう。

天気が下り坂に向かっているのか、空は白くぼやけていた。薄雲を通して太陽が鈍く光っているのが見える。

1年棟の外側へ回った。校舎に近いところにしゃがんで、クローバーの葉叢に目をこらす。緑色のハート型がいくつも重なって揺れていた。むっと青臭いにおいが鼻をつく。

「あ、あった」

四つ葉はすぐに見つかった。と思うと、次々に四つ葉が目にとまる。どうやらかたまって四つ葉が出ているらしかった。嬉しくなって摘み始める。みんなに分けてあげようと思い、夢中で摘んだ。

立ち上がると、くらくと目の前が暗くなった。最近よく立ちくらみが起きるのだ。ちょっと目を閉じて、まぶたの裏側で翻る白黒のチェッカーフラッグが消えるのを待つ。

ゆっくりと階段を上って部室へ向かった。

四つ葉のクローバーはほんとうに幸せを運んでくるのだろうか。

あたしのしあわせってなんだろう、とぼんやり思った。

中間、もっとがんばればよかったな、と今更のように思う。北岡高へ来たからには、やっぱり勉強ができた方がいい。いい成績を取って、いい大学へ行きたい。そのためには、弱い自分に負けていてはだめなのだ。

部室に戻ってクローバーを分けていると、みんなが戻ってきた。

「四つ葉のクローバー、たくさんあったからおすそわけするね」

沢井に渡すと、にこっと笑って「ありがとう」と言ってくれた。

「人からもらったのだと、いいことが起こらないかもしれないけどね」

なんとなく照れくさくてそんなことを言うと、沢井はクローバーを生徒手帳にはさみながら「気がつかないだけかもしれないよ」と言った。

そうかな。そうかもしれないね。奈緒もクローバーを手帳にはさみながらそう思った。

6月の初めに球技大会があった。2日間の日程で行なわれる大会で、奈緒はバレーボールの試合に出た。

体育館脇の外のバレーコートが試合会場だった。固い地面に白い砂がまかれ、陽光をはね返している。そこで試合をしていたらすっかり日に焼けてしまった。レシーブした両手首が赤くなって、じんじんする。これがいやなんだよなあ、とため息が出た。

次の試合まで少し時間があったので、他の新聞部員の競技を見に行くことにした。グラウンドへ行くと、ちょうど沢井のクラスがソフトボールの試合をしていた。

クリーム色の体操服の上下を着た沢井が、グラブを構えている。いつもと違う姿が新鮮だった。

外野にいたので、何もしていないように見える。と、そこへボールが飛んできた。沢井がジャンプしてボールをつかむ。うまくグラブにボールがはまって、1つアウトが取れた。

「へー、サワさん、かっこいい」

奈緒にはあまり野球の知識がないが、ソフトボールも同じようにスリーアウトでチェンジすることは知っている。どうやら今、沢井がとったアウトが3つ目だったらしく、沢井はベンチの方へ駆け戻って行ってしまった。今度は彼のクラスの攻撃のようだ。

「なあんだ」

沢井がいなければ全然面白くない。別の競技を見に行こうとぶらぶら歩き出した。

梅雨入り前の6月の空は青く晴れて、まぶしい日差しがグラウンドに降り注いでいた。学校全体が、うわーんというざわめきに包まれている。

グラウンド横の短い階段を降りてテニスコートへ向かう途中で、松本和樹に出会った。松本は腕に「新聞部」と書いた腕章をつけ、大きなカメラを持っていた。

「いい写真撮れた？」

「おお、まあな。みんななかなかがんばってるよ。磯山さんはなんに出たの？」

「バレー。もうちょっとしたら次の試合なんだ。松本君は？」

「俺はバスケ。ひとつだけ勝った」

「いいなあ。あたしもバスケがよかったな。バレー苦手なんだよね」

「来年はバスケに出れば？」

「そうするよ。どこの写真撮ってきたの？」

「卓球……とテニス」

テニスが付く足しのように聞こえたのは気のせいかな。

「これからソフト撮ってくるよ。沢井君のクラスはまだ試合やってる？」

「うん、たぶん」

じゃ、と松本は軽く手を上げて、グラウンドの方へ歩いて行った。サワさんの写真、撮るのかな。撮ったら1枚欲しいな。

舞は武道場で卓球の試合に出ているはずだった。見に行こうかと思ったが、時計を見たらもう

次の試合の時間だった。仕方なくバレーコートへ向かう。次の試合はなるべくレシーブしないようにしよう、と思いながら。



2日目もいい天気だった。

全校生徒がグラウンドに集まり、体育主任の先生が「今日も一日けがのないようにがんばってください」と簡単な挨拶をして球技大会が始まった。

昨日で奈緒のクラスは全試合を終えており、今日はそれぞれの競技の決勝戦を見学するだけなので暇だった。

何を見ようかとぶらぶら歩いていたら、沢井の姿を見つけた。「サワさん！」と声を掛けると、「おはよう。磯山さん、今日試合は？」と話しかけてきた。

「今日はもうなんにもないんだ。サワさんは？」

「僕も今日は試合なし」

そのままなんとなく並んで歩く。

「舞は卓球の決勝なんだよね」

「見に行こうか」

思いがけず沢井と行動をとることにした。

「松本君は今日もカメラマンなんだよね」

「うん。吉田さんと谷村先輩も写真撮るって言ってたよ」

「いいの撮れるといいね。『北岡』に載せるんでしょ」

そんなことを話しながら体育館裏手にある武道場を目指して歩いた。沢井と並んで歩いていること、すぐ隣に沢井がいることが不思議な気がする。

嬉しくなってスキップしていると沢井に「楽しそうだねえ」と言われてしまった。

「お天気いいからね」と天気のせいにしてごまかす。

武道場の入り口で靴を脱いで中に入ると、もうすでにたくさんの生徒が集まっていた。

「あ、もう舞の試合が始まってる」

座っている生徒の前を身をかがめて通り抜け、舞がよく見える場所に腰を下ろす。沢井も隣に座った。何気なく肩が触れて、急に自分の肩を意識する。ほのかに体温が伝わってきた。意識が肩と視覚に分裂してしまったようで、意識的に舞を見ていないと、肩の感触に気を取られてしまいそうだ。

舞は髪を後ろで1つに結んでいる。いつもはさらさらと揺れている茶色の髪が、今日はしっぽのように舞の背中で跳ねていた。細い首筋から続く小さな頬が、きゅっと引き締められて、ピンポン玉を追いかける目元が涼しい。

「舞はかわいいなあ」

思わずそうつぶやいた。舞は小柄でほっそりしているので、ぴよこぴよこ動いているとほんとうにかわいらしい。

「ほんと、かわいいよね」

つい沢井に同意を求めると、彼は少し意外そうな顔をした。

「秋本さんが？」

「うん。かわいいでしょ？　かわいいよね」

問い返されたことが不満で何度かそう繰り返した。すると沢井は含み笑いをしながら、「磯山さんもかわいいよ」と言った。

「えー、なにそれ。なんかあたしが無理矢理言わせたみたいじゃん」

奈緒が口をとがらせると、さらにおかしそうに笑った。

舞の試合が終わって武道場を出たとき、少し先に、一年生の間で美人と評判の女子生徒がいた。奈緒が「あ、五組の美人さんがいる」というと、「え、どれどれ」と沢井がきょろきょろした。「ほら、あそこ」と指さす。

「へえー、あれがあ？……磯山さんの方がかわいいよ」

「あはは、そんなことはないよ」

沢井がなぜそんなことを言うのかわからない。笑ってごまかすしかなかった。でも悪い気はしない。

「あ、保科先輩がいた」

舞が保科に駆け寄っている姿が見えた。今の試合の報告をしているのだろうか。うれしそうに笑いながらしきりに保科に話しかけている。聞いている保科の表情が優しげだったのが印象的だった。

（いいなあ。舞、がんばれ）

小さくガッツポーズをした。なぜか今は無性に舞の恋を応援したかった。

そのあとテニスコートへ移動してテニスの試合を見た。

日差しが強くなり、じりじりと肌が焼けるのがわかる。昨日も焼けてしまったのに、また今日も焼けてしまう。長袖を持ってくればよかったなあと思いながら、半袖から出た腕をさすっていると、沢井が「これ、着る？」と着ていた長袖の体操服を貸してくれた。

「いいよ、サワさんだって日焼けしちゃうじゃん」

と一応遠慮はしたのだが、「僕は大丈夫」というので、ありがたく羽織らせてもらうことにした。シャリシャリとした体操服の感触が気持ちいい。

ちょうどそこへ2年の川村景子が通りかかった。

「ふたりで観戦？　いいねえ、仲がよくて」

そんなからかいの言葉がやけに心地いい。調子に乗って、沢井の帽子と奈緒のたすきを交換したりした。この日は沢井の機嫌もよかったらしく、面白がって奈緒のたすきを額に巻いてくれた。あとでそのたすきを返してもらって巻き直したとき、これが沢井の額に巻かれていたのかと思うと、そのたすきが特別なものに見えた。

その日の夜、ベッドに寝転んで昼間のことを思い返していると、また嬉しさがわきおこってきた。

——かわいい、だって。そんなこと言われたの初めてだよ。

枕を抱きしめてベッドの上を転げ回る。

——体操服、貸してくれたんだよなあ。これ、着る？なんちゃって。

沢井がどういうつもりなのかはわからない。たいした意味はないのかもしれない。しかし奈緒の中での沢井の存在が急に大きくなったのは確かだった。

——あたし、サワさんのこと、好きかも。

言葉にしてみると、ほんとにそんなふうに思えてきた。舞の気持ちが少しわかったような気がした。

日曜日をはさむと、球技大会で浮ついた校内の雰囲気も少し落ち着きを取り戻す。

月曜日の放課後。部室に集まっていつものように雑談に花を咲かせていた。

「松本君、写真どれくらい撮ったの？」

みどりが聞くと、「うーん、けっこう撮ったよな」と松本が吉田に同意を求めた。

「そうだね。谷村先輩も撮ってたし、写真はかなりあるよ」

「それって、全部『北岡』に載せられるわけ？」

谷村の方へ質問を投げると、谷村は首を振った。

「そんなにページがあるわけじゃないから、いいとこ5枚くらいかなあ」

「えー、そうなの？ 残りがもったいないじゃん」

みどりの抗議に松本もそうだそうだとうなずく。

「でも仕方ないでしょ。それに選択肢が多い方がいいからたくさん撮ったわけだし」

鈴木が訳知り顔で言った。

「そうだけどさ……」

みどりは不満そうに唇を噛んでいたが、突然「そうだ！」と叫んだ。

「壁新聞作ればいいんじゃない？ そうすればたくさん写真も張れるじゃん」

「ああ、それ、いいね」

谷村が身を乗り出してきた。

「面白そうだ」

それから、その場にいるメンバーで詳しい話し合いが始まった。来ていない部員には後で連絡することにして、とりあえずその日から始めることにした。

みどりが事務室から模造紙をもらってきて、ばさばさと机の上に広げる。白い模造紙を見ると胸がわくわくした。

せっかく壁新聞を作るのだから、あまり球技大会から日を置くと関心が薄れてしまう。新聞部の部員たちは、連日部室に詰めて壁新聞作成にあたった。

とはいっても、ついつい雑談に流れてしまう傾向にあることは否めなかった。特に顧問の佐藤が顔を出すと、作業の手を止めて話し込むことが多かった。

佐藤はまだ若く、やたら恋愛談義をしたがった。

「恋はいいぞ」

二言目にはそう言って、みんなをけしかけた。舞はしょっちゅう佐藤に恋愛相談を持ちかけるようになっていたが、そんな舞を、みどりと奈緒は少し距離を置いてみている。

「恋、かあ。両思いとかあこがれるけどね」

写真を選びながら奈緒がため息混じりに言うと、みどりは「そうかな」と気のない返事を返してきた。

「好きとか、嫌いとか、めんどくさくない？」

「うーん、めんどくさくはないけど、でもちょっとしんどいかも」

夜毎、勉強と沢井への気持ちの狭間で翻弄されている奈緒は実感を込めて言った。

「あたしが見るところ、松本君は舞のこと好きだと思うよ」

突然みどりがそんなことを言う。

「え？ そうなの？」

「うん。いつだったか、公園でみんなで遊んだことあったじゃん。あのとき、保科先輩とブランコに乗ってる舞をじっと見てたことがあるんだよ。あたしが『つらいね』って言ったら、『まあ、しかたないよな』だって。これってそういうことじゃない？」

「へえー」

間抜けな相づちを打って、つい松本の方を伺ってしまう。彼は吉田と一緒に写真の整理をしていた。

「そうなんだー。知らなかったなあ」

「まあ、今はどうだか知らないけどね」

そうだったのか。それでは、球技大会のときはつらかったかもしれない。初日に会ったときに、卓球の写真を撮ってきたと言っていたが、そのとき舞の写真は撮ったのだろうか。

みどりに沢井への気持ちを言おうかどうしようか迷った。自分でも自分の気持ちがよくわからないのである。

「サワさんて、誰か好きな人いるのかなあ」

つい、そんなことを聞いてしまった。

「やっぱり」

「なにが、やっぱりなのさ」

「あんな、サワさんのこと気になってるでしょう」

ズバリ、という感じでみどりが言う。

「見てればわかるよ」

「やっぱりそう？」

「なに、自分でわかんないの？」

「いや、たぶんそうだと思うんだけどさ。なんかまだはっきりしない感じなんだ。いいなあって思う時もあるし、別にどうってことないやって思う時もあるって」

「ふうん」

みどりは「こっちとこっち、どっちがいいと思う？」と2枚の写真を持ち上げて聞いてきた。

「うーん。……こっち、かな」

自分の気持ちもこんなふうな形にして見比べられたらいいのに。

「そうやって決めればいいじゃん」

「決めるのもなんかいやなんだよね」

「はあ。やっぱ、めんどくさいね」

みどりがあきれたようにため息をついた。

「どんどん選ばないと、記事を書く時間がなくなっちゃうよ」

うん、とうなずいて、奈緒は写真を手に取った。

「ごめん、俺、今日用事あるから、先に抜けるわ」

保科がそう言って先に帰っていったのは、壁新聞作りも終盤に入った日のことだった。

保科と舞は卓球の欄を担当している。卓球の欄はまだ完成してはいなかった。みどりが担当しているバレーはもうほとんどできあがっており、彼女はテニスの欄を手伝っていた。奈緒はソフトボールの担当だったのだが、こちらはいまだに写真の選別が終わっていなかった。

保科が部室を出て行くのを見ると、舞は持っていたマーカーペンを放り出し、「待って」と言いながら部室を飛び出して行った。

しばし部室内に沈黙が落ちる。みんなあっけにとられていた。

「すごいな」

やがて松本がぼつりつつぶやいた。それをきっかけにして、みなが一斉に騒ぎ出した。

「ちょっとすごくない」「ドラマみたい」「やるなあ」などなど、今見た舞の行動に刺激されて興奮気味である。

——恋をすると変わるなあ。

舞が保科に恋していることはもう誰もが知っていることだったが、改めてその具体的な行動を目の当たりにすると実感を持ってその事実が迫ってくる。

しかし、みどりは不機嫌だった。

「卓球の欄、まだできてないんだよね。どうするんだろ。自分の恋に忠実なのはいいけどさ、ちゃんと責任は果たしてほしいよね」

みどりの言い分は正しい。しかし心のどこかで、舞を羨ましく思う気持ちもあった。あそこまで自分の感情に素直になれるなんてすごい、と思う。告白すらおぼつかない、それ以前に自分の気持ちもはっきりしない奈緒にはとうていできないことだ。

ソフトボールの写真の選別が遅れているのは、奈緒が沢井の写真に見とれたり、つつい沢井とおしゃべりしてしまっているせいだった。あからさまに追いかけてりしないで、実は、やっていることは舞と大差ない。

「はいはい、みんな。落ち着いて」

谷村がみんなをなだめる。

せめてちゃんと責任を果たそう。奈緒は心の一部に蓋をして、作業を続けた。

球技大会から2週間後に、無事、壁新聞が完成した。たくさんの写真が貼り付けられた壁新聞は、職員室横の掲示板に張り出された。景子が放送部の友人に頼んで昼の放送で宣伝してもらったこともあって、多くの生徒が読んでくれた。

みどりは壁新聞作成にかなりの手応えを感じたようで、「これ、毎年の恒例にしよう」と張り切っている。

来年も作るのか、とぼんやり思った。来年は自分はどうなっているんだろう。ちゃんと2年生で先輩をやっているんだろうか。

というか、この先ちゃんと生きていけるんだろうか。

このごろよくそんなことを考える。顧問の佐藤が部室でしきりに恋愛談義を繰り広げるのを聞いていると、自分には恋愛なんて無理なんじゃないかと思えてくる。特別かわいくもなく、たいして勉強もできず、平凡の極みのような自分。恋に生きる、なんてすごくドラマチックで憧れるけれども、たぶん自分にはそんな人生は送れないような気がする。

では勉強に生きるのか。

みどりはこつこつと努力できるタイプだ。壁新聞を作っている最中に実力テストがあったのだが、あんなに壁新聞作りに熱中しながらもしっかりテスト勉強をしていたらしい。奈緒は、「やらなくちゃ」と口では言っていたが、結局中途半端に放り出してしまった。

眠いから。

疲れているから。

そんなのは言い訳だとわかっていた。逃げているだけだ。そう思いながらも心の片隅で「なぜ逃げちゃいけないの」という声がある。嫌なことからは逃げたい。だから、「もう、わかんないや」と教科書を閉じてしまう。どうせあたしなんかなんの価値もない人間なんだ。生きていても仕方ないんだ、と思う。

顧問の佐藤に、「磯山も平凡な女子高生になってきたな」と何かの時に言われたことがある。平凡である、ということが、奈緒の中では価値がない、という意味に変換されていた。

その一方で、完全にこのレールから降りてしまうことも怖くてできないのだった。北岡高校へ通う優等生のあたし。ここから落ちたらもう戻れない。惰性に流された方が楽だと思えばから、流されることへの恐怖に襲われる。みどりのように、自分を律することもできず、だからといって落ちていく勇気もない。時々思い出したようにがんばってみたり、また放り出したりの繰り返しだった。

ある日、部室で、リーダーの宿題をしていた。

その日は用があって、5時半のバスに乗るつもりでいた。だが、夢中になってやっていたら10分前になってしまい、慌てて荷物をまとめて部室を飛び出し、バス停まで全力疾走した。それなのに、タッチの差でバスが出てしまった。はあはあ荒い息を繰り返しながらがっくり肩を落としていると、遠くから沢井が走ってくる姿が見えた。手に何か持っている。なんだろうと思って見ていると、奈緒のそばへきて、手に持っているものを差し出した。

「忘れ物」

「あ！」

それは奈緒のルーズリーフと筆箱だった。慌てて飛び出してきたから、部室に忘れてきてしまったらしい。

「わざわざ持ってきてくれたの？ うわ、ありがとう！」

盛大に礼を言いながら受け取る。でも、どうして沢井が走ってきてくれたんだろう。

沢井は軽く息を切らしながら心配そうに言った。

「バス、まだ？」

「いや、タッチの差で間に合わなかった。来たら行っちゃったんだ」

「時間、大丈夫なの？」

「あんまり大丈夫じゃないけど、でもしょうがないし」

「そっか。まあこの時間なら歩くよりバスの方が早いよね」

沢井はすぐに部室に戻らず、バスが来るまで一緒にいてくれた。奈緒は、うれしいやら、申し訳ないやら、ドジな自分が恥ずかしいやらで、何をしゃべったのかも定かではなかった。

やがてバスが来て、奈緒が乗り込むと、窓の外で沢井が小さく手を振った。奈緒も振り返す。バスの窓から遠ざかる沢井を見ながら、奈緒は先週の出来事を思い出した。

---

それは、壁新聞の最後の仕上げをしている日のことだった。

机の上がいっぱいだったので、ソフトボールの欄の模造紙を床に置いて書いていた。紙に覆い被さるようにして字を書いていたのだが、マジックインキのしんねりとした臭いを吸い込んでいたら、胃が変な具合になってきた。

「うー、気持ち悪い」

深呼吸しようと顔を上げて立ち上がったとたん、目の前が真っ暗になった。耳の奥がきーんと鳴る。ぎゅっと目をつぶると、白黒のチェッカーフラッグが翻った。

「どうしたの？」「大丈夫？」



みんなの声に「……大丈夫、立ちくらみ」と答えながら、へたへたと座り込む。しばらくじっとしていると、なんとか治まったので、ごめんごめんと謝りながら作業を再開した。

しかしその後も、立ち上がるたびに立ちくらみが起き、しまいには吐き気を催してきてしまった。

「ごめん、ちょっと休憩する」

みんなの邪魔にならないように部屋の隅へ行き、壁にもたれて腰を下ろした。なるべく上の方を向いて、浅い呼吸を繰り返す。

「大丈夫？ 磯山さん」

沢井が心配そうに声をかけてきた。

「うん。こうやってれば平気。ごめんね」

「いいよ。ゆっくり休んでて」

沢井は穏やかな口調で言った。その声を聞いていると少し気分がよくなってくる気がする。奈緒はぼんやりとみんなの作業風景を眺めていた。

奈緒が抜けたので、沢井が一人でソフトボールの欄を担当している。真剣なまなざしで手元を見つめ、キュッキュッと音をさせながら字を書いている。

優しいんだなあ、サワさんは。

どうして優しくしてくれるんだろう。こんなあたしに。

考えても答えが出るわけもなかった。

やがて作業終了の時間がきて、帰ることになった。また立ちくらみを起こさないように、そろそろ立ち上がる奈緒を、沢井が心配そうに見ている。

「大丈夫だよ」

無理にでも笑ってみせた。しかし、鞆を持って歩き出すと、まっすぐ歩けないほどめまいがした。「先に行ってて」とみんなには言って、休みながらよろよろと歩く。

「鞆、僕が持つよ」

奈緒の様子を見かねたのか、沢井が奈緒の手から鞆を取り上げた。

「重いからいいよ」

と遠慮したのだが、「いいから、いいから」と取り合わない。結局、電車に乗るまで、沢井が鞆を持っていてくれた。電車は反対方向だったので、先に奈緒が乗る電車が来たときにはドアのところまでついてきて、何度も「大丈夫？」と気遣ってくれた。

家に着いても胃のむかつきはおさまらなかつたし、少しめまいも残っていたが、ベッドに寝転がりながら奈緒は幸せな気分だった。

---

どうして、サワさんは優しくしてくれるんだろう。

ようやく日が陰り始めた街をのんびり走るバスに揺られながら、奈緒はまた答えのない問いを繰り返した。もしかしたら、その問いには、自分で答えを作ってもいいのだろうか。その答えが

正解かどうか、どうやって確かめたらいいのだろう。そもそも、自分で答えなんか作っちゃっていいんだろうか。

バスの振動が軽い眠気を誘う。だんだん考えるのがめんどうになってきて、まっいいか、と思う。今日は勉強、がんばろう。そう思って短い眠りに落ちた。

7月になった。

壁新聞作りが終わって、次の「北岡」発行まで特に仕事がない。部室に集まっても、なんとなく面白くなかった。1週間後には期末考査があるので、そろそろ勉強にも本気を出さなくてはいけないのだが、空気の緩みと同調しているのか、奈緒の精神と肉体は緩みっぱなしだった。

面白くない。つまらない。毎日がかつたなくてしかたなかった。

勉強しなくては、とスタンダードを広げても、途中で寝てしまう。最終的にはやっつけ仕事でつじつま合わせをしてしまうことはわかっている。そんな勉強の仕方では意味がないとわかっている、自分の怠惰の中にもぐりこむ後ろめたい快感に負けていた。

惰性のように部室へ足を運ぶ。他のみんなも、なんとなく生気のない顔をして、ぼんやりしていることが多かった。

そんなある日。

奈緒とみどり、1年男子4人できるときに珍しく話が盛り上がった。きっかけは、沢井の「最近虚無的なんだよね」という発言だった。

「そうそう。なんか、何やっても面白くないんだよね」

鈴木がうんざりした顔をする。

「なんか面白いことないかなあ」

奈緒は、机に掛けられたビニールのテーブルクロスをハサミで細かく切り裂きながらつぶやいた。シヨキシヨキと切っていくとなぜか心休まる。

「面白いことってなによ」

みどりは相変わらず問題集を机の上に広げていて、ときどき鉛筆を動かしていた。

「なんか、だよ。舞みたいに恋に生きてれば毎日楽しそうだけどねえ」

皮肉というつもりもなくそういって、みどりは「それでもなさそうだけど」とつぶやいた。

「男の子は恋とかしないの？」

「しないわけじゃないけどねえ」

鈴木は首をひねり、吉田に「どう？」と聞いた。

「まあ、好きな人くらいはいるけど、でもだからってどうこうするわけじゃないから」

吉田の爆弾発言にみんなは色めき立った。

「えー、吉田君、好きな人いるんだ」

「そりゃ、好きな人くらいはいるでしょ、誰だって」

「告白とかしないの？」

奈緒が聞くと、吉田はあっさり首を振った。

「そういうんじゃないから」

そういうんじゃないならなんなんだ。

すると、沢井が「僕、中学の時に後輩の女の子から告白されたことがあるよ」と言い出した。

「え、そうなの？　すごいじゃん」

なぜかほんの少し胸がチクチクした。

「で？ つきあったの？」さすがにみどりも興味を引かれたようだ。

「いや、断った」

えー、なんでー、もったいなーいと言う声が一斉に上がる。

「だって、中学だよ？ 全然そういうのわかんなかった」

そういうものなんだろうか。しかし、過去とはいえ、断ってくれてよかった、と思う。

「それに」

沢井は急に冷めた表情を浮かべて言った。

「そんなの、つまらないでしょ？ 1対1でつきあうより、大勢でわいわい遊んだ方が楽しいよ」

「ああ、わかる。なんか1対1って窮屈な感じだよな」

吉田が我が意を得たりとばかりにうなずく。するとそれまで黙っていた松本が、

「そうかあ？ 俺は彼女が欲しいけどな」

と率直な意見を述べた。奈緒はちらっと舞のことを思う。

「当分、彼女作らない主義で行こうかな。なんかいろいろめんどくさいし」

「作らないじゃなくて、できない、じゃないの？」

「大きなお世話」

男子4人はわっと声を合わせて笑った。みどりも笑っていたが、奈緒はあまり笑えなかった。むりやり笑顔を作っていたが、今の沢井の言葉がショックだったのだ。

そうなのか。サワさん、彼女つくらない主義で行くのか。

その考え方はとてもすがすがしく清らかな感じがした。いかにも、沢井にふさわしい主義に思える。そういう、俗世間的な、惚れた腫れたというドロドロした世界は沢井には似合わない。すっきりと、勉学の世界に邁進するというストイックさが彼には似合う。

翻って奈緒は、自分の感情がひどく醜いもののように思えた。好きだの、嫌いだの、なんてめんどくさいことにとらわれているんだろう。

もうやめよう。サワさんがどうか、そんなこともう考えたくない。

——あたしが舞みたいにかわいかったらな。そうしたらもっと積極的に出られるのに。

ふとそんなことを思う。どうしてあたしは舞みたいじゃないんだろう。

気持ちを切り替えて、期末の勉強に取り組む。

そう思っているはずなのに、どうにもやる気が出てこない。気がつく、沢井のことを考えている。

顔が見たい、話がしたい、一緒にいたい。クラスが違うので、朝登校するときに出会うか、図書館で勉強するときと一緒にいるか、部室で顔を合わせるか、くらいしかチャンスがない。下手すると1日中顔も見られない日もある。顔を合わせても、話ができるとは限らないし、沢井の機嫌がいいかどうかもわからない。なんでサワさんの機嫌が気になるんだ。こんなに気になるということは、あたしはサワさんのことが好きなのだろうか。好きならどうだというんだ。沢井は恋愛には興味がないのだ。もし仮に告白したとしても、中学の後輩のように振られるのがオチだ。そうなったら、あたしのこの思いはどうなる。だったら、いっそ、何も言わない方がいい。言わないでただ彼のことを見ていればいい。見てると苦しくなるけど。気まぐれのように優しくなったりするから。黙っていればその気まぐれの優しさを味わうこともできる。好きだとかそういうこと意識したらきっとはっきり離れていってしまうだろう――。

エンドレスの思いに振り回されながら、かろうじてテスト範囲をさらった。それ以上のことをやる気にはどうしてもなれなかった。もし結果が悪くても、もういいや、と思った。

七夕の日から期末考査が始まった。中間と同じく4日間の日程である。

初日は、思ったよりできた。直前に必死になってやったところが出題されたのだ。後ろに張り出された解答を見ても、かなりできている。やっぱりやったらやっただけのことはあるのだ。勉強はあたしを裏切らない。この勢いで明日の勉強をしていこうと思って図書館へ行くと、新聞部のいつものメンバーが顔をそろえていた。お昼ご飯を一緒に食べ、他愛のない会話をしながら、勉強に励む。はかどるときは、勉強はほんとに楽しかった。信じられないほどスムーズに頭に入ってくる。

2日目も、テスト終わりに図書館へ行ってみた。昨日の夜も、珍しくやる気が出たのだ。ノートに字を書きすぎて指が痛くなるくらいだった。そのおかげか、今日のテストもまあまあの出来だった。昨日は楽しかったな、またあんな雰囲気にならないかな、と淡い期待を抱きながら図書館に入った奈緒だったが、今日は谷村と保科と舞しかいなかった。みどりは今日は用があると言っていたので仕方ないのだが、1年男子が誰もいないのは寂しかった。

「今日は少ないねえ」

ほんの少し気分が下がった。しかしそれを認めるのも癪だったので、なんでもない顔をして、勉強に取りかかった。

今日は文字がよそよそしい。昨日、あんなに親密な感じで奈緒の頭に飛び込んできた知識が、今日は見知らぬ他人のようだ。食べ物が急に砂に変わったような、ジャリッとした嫌な感触だ。砂地を無理に踏みしめるように、ノートに文字を書き連ねる。明日は生物と地理だから、どちらも暗記科目だった。

砂漠を歩くような勉強に疲れて、はあ、とため息をついたときだった。

沢井が図書館へ入ってきた。

「おーい、沢井君、こっち」

谷村が手を振って沢井に合図する。「今日は来ないのかと思ったよ」

あたしもそう思ったよ。

心の中で沢井に言う。

「どうしようかと思ったんだけど、地理が間に合いそうにないから」

沢井はそう言って、すぐさま地理の教科書を広げた。

アイラブ地球。

急に地理が楽しい学問のように思えてくる。しかし、手のひらを返したように浮かれ始めた自分をいましめるように、奈緒は気持ちを引き締めて、真面目に勉強を続けた。

昼ご飯を食べた後、谷村たちは先に帰っていった。沢井はもう少し残ると言ったので、奈緒も残ることにした。特に会話はなかったのだが、今日の沢井は柔らかい雰囲気だった。

3時頃、さすがに切り上げようということになって、一緒に学校を出た。

太陽はまだ高い。沢井の白いカッターシャツがまぶしかった。がらんとしたバスに乗り、しばらくしゃべっていたのだが、次第に奈緒は眠くなってきた。首をかくんかくんと揺らしていたら、沢井が「肩にもたれてもいいよ」と言ってくれた。どうしようと迷う間もなく、彼の肩に首をもたせかけて、すたと眠りに落ちてしまった。

最初の2日間が楽しすぎたのかもしれない。テスト期間中なのに、楽しいと思ったのがいけなかったのかもしれない。

3日目。地理で大きな勘違いをしてしまい、2問もペアにしてしまった。かろうじて生物は答えを書いたものの、不完全な解答が多くて、得点は期待できそうになかった。

がっくりと落ち込みながら図書館へ行くと、今日は保科と舞しかいなかった。行きがかり上仕方なく2人と同じ机についたのだが、すぐに後悔した。目の前の2人の様子——見つめ合ったり、楽しそうに話をしたり——を見ているのがつらくなってしまったのだ。この日は結局沢井は来なかった。おざなりに教科書を読んで、そそくさと席を立った。

だから、色恋沙汰にうつつを抜かしてはいけないのだ。沢井に会えなかったことも、テストの出来が悪かったことも、無性に悲しくて悔しかった。悲しくて悔しいと思っている自分が腹立たしかった。

俗事とは縁を切る。きっぱりとそう決意した。

4日目。最終日なので、朝図書館へ行こうと思い、いつもより早く家を出た。

駅のバス乗り場へ行くと、保科と舞、それに沢井がバスを待っていた。

「おはよ」

「おはよう。みんなも図書館へ行くの？」

「最後だからねー。手遅れかもしれないけど」と保科が笑う。

沢井はなぜか不機嫌そうだった。

「サワさん、どうかしたの？」

「……頭、痛いんだよね」

「風邪引いたの？」

「たぶん、違うと思う。頭痛持ちなんだよ、僕」

そうやって顔をしかめた。とても話しかけられるような雰囲気ではなかった。奈緒は、沢井から少し離れた所でバスを待った。

ほどなくバスが来て乗り込む。保科と舞はいちばん後ろの座席へ直行し、並んで座った。沢井はそそくさと1人がけの座席に座り、窓に頭をもたせかけて目を閉じている。肩すかしをくらった気分、奈緒は反対側の2人がけの座席にぼそっと座った。朝から嫌な展開である。何度か盗み見たけれど、降りるバス停に着くまで、沢井は目を開けなかった。

ふうん。ふうん。別にいいんだけどね。

どんどん沢井に対する反感が募る。

バスを降りると、舞が当たり前のように「一緒に行こ」と言う。あやふやにうなずくと、

「……サワさんもいるし」

訳知り顔をされた。先に降りた沢井は素知らぬ顔をしてどんどん歩いて行く。

一瞬、カッと頭に血が上った。

「サワさんなんて、関係ないよ！」

思いの外強い声が出てしまった。沢井は聞こえたのか聞こえなかったのか、なんの反応も示さないまま歩いて行く。

「行こ」

いつもと違って軽い鞆の持ち手をぎゅっと握って歩き出した。

一緒に行こうと言うからには、並んで歩いて行くのかと思っていたのに「ねえ、舞」と話しかけたら、舞の姿がなかった。振り返ると舞が保科と並んで歩いている。

——今朝、全校でいちばん間抜けなのはあたしだ。

怒りにまかせて勢いよく足を動かし、途中で沢井を追い抜いた。顔も見なかった。



最後のテストは古典だった。雅な世界を学ぶ古典のテストには、雅のかけらもなかったが、そんなことはどうでもよかった。解答欄をひたすら埋める。朝の怒りはだいぶ小さくなっていた。目の前の答案用紙に向き合えば、些細なことは横に置いておくしかないのだ。

ようやくテストがすべて終了した。けだるい解放感に包まれる。あとはもう夏休みを待つだけだ。夏休みと言っても、もちろん、大量の宿題が出されるので気を抜くことはできないが、それでも夏休みは夏休みである。

部室に行ったら、みんながそれぞれくつろいでいた。1年男子4人組はトランプに余念がない。最近セブンブリッジが流行っているらしく、鈴木が細かく勝敗表をつけている。みどりはさすがに今日は何も勉強道具を広げておらず、セブンブリッジの観客になっていた。奈緒は、手持ちぶさたで、うろうろしてしまった。

「なにしてんの、奈緒」

みどりがあきれて、自分の隣に座れという仕草をした。とりあえずそこへ座る。

「終わったねえ」

しみじみ、という感じで言うと、みどりが「今回はどうだったの」と聞いてきた。

「聞かないで。過去のことは忘れたい」

「また、途中で寝ちゃったんでしょ」

「寝る子は育つのさ」

「頭の中身が育ってないじゃん」

「だってまだ15歳だもん」

「あたしも15なんですけど」

みどりと馬鹿なことを言い合いながらトランプをしている沢井をつい見てしまう。

朝、頭が痛いと言っていたが、大丈夫なのだろうか。聞いてみたいけれども、彼のとりつく島もない顔を見るととてもそんな勇氣は出てこなかった。

「ポン！」「あー、そう来たか」「ふっふっふ。勝ちもらったね」男の子たちは楽しそうにカードをやりとりしている。

「新聞部の男子は仲がいいよねえ」

「信頼しあっちゃってんじゃないの」

みどりは4人を眺めてふん、と鼻先で笑った。

すると鈴木がこちらを見て、にやっと笑った。

「そのとおり。やっぱり信用できるのは男だよ」

「そうそう。男と女は信用しあえないね」

手札を見ながら、沢井が済まして付け加える。

「え、ちょっとなに。どういうこと？ 男女間に信頼関係は成立しないっていうの？」

聞き捨てならないという感じでみどりが言った。

「成立しないでしょ。男と女に信用はありえない」

「えー、なんかそういうのショックだなあ。ねえ、奈緒」

「……え、あ、うん」

かろうじて返事をしたものの、本当はぐっさり心を切りつけられたようなショックを受けていた。サワさんて、そんなふうに思ってるんだ。

「とかいいながら、その札を捨てるかー」

松本が悔しそうに叫んだので、その話題はそれきりになった。

その日、奈緒は、沢井には近寄らなかった。沢井があんな考えの持ち主だと思うと、次第に顔を見るのも嫌になってきていた。

だから。俗事とは縁を切るって決めたのに。

同じことを何度思えばかなうのだろう。もう沢井のことを考えたくなかった。彼の言動で一喜一憂するのはつらすぎる。

「みどり、帰らない？」

同じ部屋にいるのもうっとうしくなってきた、みどりに声をかけた。

「そうだね。たまには早く帰るか」

男の子たちは再びセブンブリッジの勝負に熱中していた。鞆を持って部室を出ようとする顧問の佐藤がやってきた。

「お、なんだ、帰るのか」

「はい」

「気をつけて帰れよ」

「はい」

なんだ、またトランプやってんのか。そう言いながら部屋に入った佐藤が「なんだこりゃ」と声を上げた。

何事かと思って佐藤の方を見ると、テーブルクロスの上を持ち上げている。そこは、この間奈緒がハサミで細かく切り刻んだ箇所であった。

「これをやったヤツは欲求不満だぞ」

あたしですとはとても言い出せなくて、逃げるように部室を出た。

「やばいよ、あれ、あたしが切ったんだ」

「奈緒は欲求不満かあ」

みどりが横目で奈緒を見て笑った。

そうなのかもしれない。この、得体の知れないもどかしさ。いらだたしさ。落とし穴に落ちるように突然現れるむなしさ。それらを解決する方法が全くわからない。

「欲求不満ってどうやって解消すればいいのかなあ」

バス停までの道を歩きながら、奈緒はぼやいた。

「恋でもすれば？」

みどりは汗をぬぐいながら適当な返事をする。

「恋で欲求不満が解消できるわけ？」

「知らないけど。舞は楽しそうじゃない？」

「こないだはそうでもないみたいなこと言ってたじゃん」

「そうだったっけ。まあそういうあれこれが楽しいんじゃないの」

突然みどりは、「ねえ、コーラ飲んでいこうよ」と言って、奈緒を「みやび」の店内へ引っ張り込んだ。「みやび」というのはバス停前にある北岡高生御用達の駄菓子屋である。

「だから、あたしはコーラ飲めないんだって」

みどりのコーラ好きは中学のころからで、その時から奈緒はコーラが飲めないことを伝えているのだが、彼女はすぐにそれを忘れて「コーラ飲もうよ」と誘うのである。

「あ、そうか。いいじゃん、チェリオで。それなら飲めるでしょ」

結局毎回同じやりとりをして、紫色のチェリオを飲むことになるのだった。

ジュースを飲んで一息ついた2人は、バスが来るまで日陰の店内で時間をつぶした。

2人がけの座席の窓側に奈緒は座る。

窓からの景色を眺めるのが好きなのだ。みどりは、「毎日同じような景色見て、何が楽しいのかね」とあきれるが、ちゃんと奈緒を窓側の席へ座らせてくれる。

窓枠で区切られた今日の風景は、「夏」とタイトルをつけたくなるような光と影に彩られていた。

「そういえば来週、奈緒の誕生日じゃなかった？」

「うん。16だって。想像つかないよ。小学生の時は、16歳なんてすごい大人だと思ってた。高校生って大人だと思ってたよ」

「実際、なってみると全然だね」

「いや、みどりは大人だと思うよ」

「どこが」

「計画通りに勉強できるところ」

「それは学生の本分でしょうが。入学式に校長先生が言ってたじゃん」

「そのとおりにできるのがすごい」

奈緒は本心からそう思っていたのだが、みどりは首を振った。

「言われた通りにしかできないなら、それは子供だよ。あたしたち、行動は大人であれって要求されるわりには、規則だらけで子供扱いされてる。学校の本心は、あたしたちをがっちり管理しておきたいんだよ。学生運動はとっくに終わってるのに、その余波はしっかり残ってるんだろうね」

奈緒たちが生まれた年に、安保闘争という運動があったそうだ。それから10年後にもう一度学生運動の高まりがあって、そのころは高校生もたくさん参加して政治活動をしたのだそうだ。奈緒たちにとっては教科書で読むような歴史的な出来事であっても、リアルタイムで体験した先生が学校に残っている限り、学校という世界ではそれは現在進行形の事象に見えるのかもしれない。校則は滑稽なほど厳しかった。どういう意味があるのかわからないものも多い。生徒指導に命をかけているのかと思うような先生も何人かいた。

「特に、男女交際にはうるさいんだよね。かわいい子とか、目立ってる子なんて、絶対目をつけられてる。舞だって何度も注意されてるんだよ」

「そうなんだ」

そんなことは全然知らなかった。奈緒はいつも服装検査を簡単にパスできる。

「ほとんどの子は真面目で優等生でいい子ちゃんばかりだよ。奈緒もあたしも、反抗することなんて思ってもいない。だってこんなに大きなりボンなんだよ？」

みどりは自分のセーラー服のリボンを引っ張った。奈緒の制服のリボンもふっくら大きく結ばれている。そういうふうにならされているから、何も考えずにそのまま着用していただけたが、生徒の中にはどんな細工物だろうというくらい小さくして結んでいる者もいる。そうまでして主張したいことってなんだろう。奈緒には理解できなかった。

奈緒にはなんの主張もない。ただただ毎日が退屈で、つまらないだけだった。何かやりたいと思うことはあっても、それは学校の中で波風を立てるような種類のことではない。先生に目をつけられるなんてまっぴらだった。それは、奈緒の中では「レールから転落すること」とほとんど同じ意味を持っているからだ。

「わざわざ校則を破ってまでリボンを小さくしたいとは思わないな」

「まあね。でもあれはおしゃれなんだと思うよ」

「そうなのかあ。なににせよ、やりたいと思うことがあるのはうらやましいよ」

「奈緒にはないの？やりたいこと」

「うーん、なんだろうなあ。まだなんにも見つかってないよ。みどりは？」

「あたしは壁新聞作ってるときすごく楽しかったんだ。だから、報道とかそういう方面に進みたいんだよね」

みどりならできるんじゃないかと思った。きちんと将来のことを考えて、計画的に進めていけそうな気がする。

あたしの将来。

窓の外に目を向けて考えた。

夏の光はきっぱりと街を照らし、奈緒とは無関係に世界は整然と動いている。その世界に奈緒の居場所はあるのだろうか。

「なんにもないなあ……あたしには。こんなんで大丈夫なのかな」

思わず不安になって弱音が出た。みどりは前を向いたまま、

「たぶん、大丈夫だって」

とつぶやく。「わかんないけど」

——はは。そうだよな。

男の子たちはどうするんだろうね、と言おうとして、ふとさっきの沢井の言葉を思い出した。

「ね、サワさんて、女性不信なのかな」

「なんで……あ、さっき言ったこと？ うーん、もしかするとそうかもね。過去に激しく女に裏切られたことがあるとか」

「だって、後輩の告白断ったんでしょ」

「それとは別に何かあったのかも。あ、それか、まだ一度も恋愛経験がないんじゃない？だからそんなこと言うのかも」

女に裏切られた、というよりも、恋愛経験がない、と言う方が沢井にはしっくり来る感じがした。

「そうかもしれない。今度聞いてみようか」

今日は機嫌が悪そうだったけど、いつかチャンスがあったら聞いてみよう。

「あー、あと1週間で夏休みかー。待ち遠しいねえ。あ、でも山ほどチャートの宿題が出るんだって。あと新しいサイドリーダーの全訳があるらしい」

「げ、なにそれ。夏休みつぶれちゃうじゃん」

「進学校ですから。勉強が本分ですよ、磯山さん」

「みどりー。一緒に勉強しようねー」

「丸写しじゃ実力つかないよ」

「自力じゃ終わんないもん」

みどりと話していると、もやもやした気分が消えていく。

その日はそれっきり沢井のことは考えなかった。

終業式までの1週間は短縮日課になった。

昼ご飯を部室で食べて、毎日のように遊んだ。校内のどの冷水器がいちばん冷たいか探し回ったり、セブンブリッジに興じたりした。

奈緒の、沢井に対する感情は相変わらず定まらなかった。

保科が部室に持ち込んだギターをつま弾いている姿を見れば、やっぱりかっこいいな、と思ったり、沢井が部室に訪ねてきた他の部の女の子と楽しそうに話しているのを見れば不愉快になったりした。沢井も、機嫌のいいときは普通に奈緒に話しかけてくるが、どうかすると冷たい一瞥を投げてくることもある。

北岡日誌が回ってきたとき、舞がちらっと、沢井と奈緒の態度について書いているのを読んだ。「なんだかすごく意識しあっているようだけど、云々」と書いてあり、その後に沢井が「別に何とも思っていない」と書いてあった。

先に沢井にそう書かれてしまったことがひどく悔しかった。だから奈緒も「全然関係ないから」と少々強い言い方で日誌を書いた。自分の書いた文字を見ながら、「そうだよ、サワさんなんて、全然関係ないんだから」と自分に言い聞かせる。

家で沢井のことを考えると、つい気持ちが暴走する。そうやっていちいち言い聞かせていないと、脳内妄想はとどまることを知らなかった。自分の気持ちながら、うんざりする。そんなふうに思わせる沢井が憎らしくなる。

終業式の朝。奈緒はバスに乗らずに歩き始めた。

ざわめく駅の構内を抜けて、地下道への階段を降りる。地下道はさすがにひんやりした空気が漂っていた。地上に上がると、すでに朝の太陽が街を照らしている。今日も暑くなりそうだった。

なんとなく、反対側の歩道に目をやる。もちろん沢井の姿はない。

授業はないので鞆が軽かった。奈緒の鞆が軽いのはこういうときぐらいしかない。いつも「いったい何を入れているの？」と驚かれるくらい重いのだ。

奈緒にしてみれば、どうして重くならないの？と思うのだが、みんなは学校に教科書を置いていたり、参考書の必要な部分だけ切り取って持ってきたりと、鞆の軽量化につとめていた。

奈緒は心配性なので、そういうことができない。あれもこれも必要かもしれない、とつい鞆に入れてしまう。辞書など家に置いておけばいいのに、「もし学校で必要になったらどうしよう」と思うと、持たずには登校できない。

必然的に奈緒の鞆は大変ふくよかであった。学生鞆のマチがほぼ開ききってしまうくらいである。高校に入ってから、手のひらに固いマメがいくつもできた。指の付け根や関節の内側部分が固くなってしまったのだ。それでも、校則だから、と思って学生鞆を使用しているのである。

今日だって、ほんとうは学生鞆などいらぬのだ。さすがに手ぶらの生徒はいないが、今日だけはサブバッグだけで登校しても見逃してもらえる。

奈緒も、サブバッグを持っていないわけではなかったが、それだけを持って登校するということがどうしてもできず、結局いつものように学生鞆を持って家を出てきたのであった。

奈緒だって、校則はばからしいと思っている。

靴下にワンポイントの模様がついていることが、どうして不良化の第一歩なのだろう。

リボンが小さいと何がいけないのだろう。

女子の髪は結ぶこと、というのに、なぜポニーテールにすると目の敵にされるのか。

入学してまもなく行なわれた服装検査で、たまたまポニーテールにしている女子がいた。本人はちゃんと結んでいるのだから問題ないと思っていたに違いない。しかし、生徒指導部に呼び出されて厳しく注意されたそうだ。「扇情的だから」というのがその理由だったとかで、かなりのブーイングが出た。しかし生徒指導部は頑として「本校生徒は清純を以てその旨とする」と言ったそうだ。ポニーテールは清純ではないということか。

奈緒は中学の時は髪を伸ばしていたが、高校入学と同時にショートカットにした。結べとか結ばないとか、そういうことでわずらわされなくなかったのだ。肩に髪が触れる前にカットすれば、なんの問題もない。

学校に楯突くようなことさえしなければ、大過なく高校生活は送れるだろう。だが、もしかしたら、そんな事なかれ主義が、退屈でかったるい毎日を生み出しているのかもしれない。だからといって、今更方向転換することもできなかったが。

国道を横断する歩道橋の階段を上る。橋を渡りながら、下の国道へ目をやった。



カブトムシの形をしたワーゲンを50台見たら願いが叶う。そんなおまじないを聞いたのはいつだっただろう。聞いたその日から、道路を走る車に注意するようになった。奈緒は車の種類などわからなかったが、その車だけはすぐに見分けられた。丸っこいカブトムシ型の車。様々な色のワーゲンが走っていたが、オレンジ色のワーゲンを見るとそれまで数えた台数がチャラになると言われていた。学校に一人、オレンジ色のワーゲンに乗っている先生がいる。なるべくその先生とは遭遇したくない、というのがこのおまじないを実行している者たちの共通の願いである。

ずっと1台、水色のワーゲンが走っていく。

「お、ラッキー」

ちょっと気分がよくなって、階段を駆け下りた。終業式だからなのか、今日は歩く生徒が少ない。鞆も軽いので、奈緒はけっこう速度を上げて歩いた。

1つ目の信号は青だった。

よかった、と思う。一方通行の小さな交差点で、もしも赤だったとしても、車さえ来ていなければ渡ることはできる。実際バスの窓からそういう人を見かけたこともある。しかし奈緒はそういうことができない。融通が利かない、小心者と言われても、規則を破ることに大きな抵抗を感じてしまうのだ。同時に、抵抗を感じつつも、車の来ない交差点で止まっていることには居心地の悪さも感じる。そんな葛藤を味わいたくないので、ここの信号が青だとほっとするのだ。

——この先の信号はどうか。いつだったか、あそこで信号待ちをしているときに、向こう側にサワさんがいたんだよね。あのときは、並んで歩いたんだ。でもまさか今日はいないよね。

そう思って後ろを振り返ったが、沢井の姿はなかった。

——だよね。そんな同じことが何度もあるわけがないや。

つい期待してしまう自分に苦笑いする。気を取り直して歩き出した。

ふいに数十メートル先の店から、白いカッターシャツのかたまりが飛び出てくるのが見えた。

「あ、サワさん」

一緒にいるのは鈴木と吉田だった。

その店は小さな総菜屋だった。おにぎりとかサンドイッチなどが古びた陳列ケースにちまちまと並べてある。その餡サンドは男子の間では密かに評判だった。六枚切りくらいの厚さの食パンにたっぷりの餡がはさんである。女子では食べきれないという噂だった。

沢井たちはもしかしたらそれを買ったのかもしれない。もしそうなら、部室で一口食べさせてもらおう。奈緒は彼らに追いつくために足を速めた。

彼らは何が可笑しいのか、肩を押し合って大笑いしている。まるで子犬の兄弟がじゃれているようだった。そしてそのまま、信号を走って渡って行ってしまった。

急いで交差点まで走ったが、タイミング悪く信号が赤になってしまった。仕方なく足を止める。

交差点の向こうを、沢井たちはどんどん進んでいく。話に夢中になっているようだった。その姿を見ているうちに、すーっと気持ちが冷めていくのがわかった。

手が届かない、というのはこういうことを言うんだらうなあ。妙に冷静にそんなことを思っている自分がいた。一瞬近づいた、と思うことがあっても、結局こうやって離れていくのだ。

まあ、いいさ。明日から夏休みだし。会わなくなれば気持ちもなくなっていこう。

いや、部活で会うのか。

—— めんどくさいな。

急にどうでもよくなってしまった。部室で会ってもふつうの顔をしていればいいじゃないか。いちいち気にすることなどないのだ。

—— そうだ、夏休みにみんなでどっか行きたいな。どこがいいかな。グループ旅行なんてすごく楽しそう。

沢井は行くだらうか。どっちでもいいか。行くなら一緒に行ってもいいけど。

信号が青になった。

奈緒は鞆をぶんぶん振って大股で歩き出した。

了